

大会長講演

未来を変える子ども達 — 私が身体にこだわるわけ —

大橋節子 (環太平洋大学 学長)

1960年代後半から、日本では様々な教育問題が報じられてきました。特に顕著だったのは、1975年を境に学校に行かない、行けないという小・中学生の数が急激に増加し、2001年には不登校児童生徒が13万人を超える現象が起きたことです。教育の根幹にあった「学校への登校」が崩れたのです。また、1980年後半には、高等学校中退者が12万人を超え、新たな教育問題として注目されるようになりました。そうした状況の中で子ども達がイキイキ・ワクワク過ごせる「楽しい学校」創りをしたいと考えて、今から31年前の1986年スタートしたのが国際自由学園でした、現在はクラーク記念国際高等学校（全日制型通信制高校）へと発展しています。

この学校は、子ども達の個性や夢に合わせて様々なコースを設定、自ら進んで積極的に生きることを第一の目標にしました。

私達が力を尽くしたのは、子ども達の様子をよく観察すること、1対1で子どもと係わることでした。そうした対応の中で、ほぼすべての子ども達が、今の自分を変えたい、環境を変えたい、そして学校に行きたいと願っていることがわかりました。



「私が感じた“からだ”の大切さ～子どもが大人に求めるものとは」を発表した村上真唯さん（クラーク記念国際高等学校卒業、甲南大学文学部人間科学科学生）。

また、多くの子ども達が、身体の不調を訴えており、特に、不登校児童生徒の「身体」と「心」には深い関連があることに気づきました。そして、結果的に、様々な不登校の理由を探し求めるよりも、身体の立て直しが一番と考え、それを教育の柱にしていきました。

やがて、身体を動かし表現をすることで、言葉が豊かになり、関わりあう力が育ち、レジリエンスや学校適応感、自尊感情が高まることがわかってきました。今では、環太平洋大学でも、身体に働きかける表現教育活動の重要性に着目しています。

いのちの形、それこそが身体です。身体が活力を得ると、心はしなやかになり、学ぶ意欲も湧いてきます。そして不登校を乗り越えて行く子ども達には、マグマのような力があると思える場面に幾度も出あって来ました。私は教育活動の中で、生まれてきたことに価値があり、生きていることが素晴らしいのだと伝え続けています。

大人は子ども達の育ちを待ち、その言葉をしっかりと聴く力が必要だと肝に銘じています。今日はクラーク記念国際高等学校の卒業生である村上真唯さんから、「子どもが大人に求めるものとは」を発表していただきます。お聞きいただければ、「私が身体にこだわるわけ」がご理解いただけると思います。

『子どもとスポーツ新時代—変革の時代を生き抜くための「非認知能力」とは』と題した本大会の様々な活動、講演、シンポジウム、ワークショップが有意義な時間となりますように。また、この大会が、私達が子ども達に伝えるべきこと、すべき活動へと繋がるきっかけとなれば幸いです。

〈プロフィール〉

Setuko OHASHI

1954年神戸市生まれ。甲南女子大学大学院人文科学総合研究科 心理・教育学専攻 博士後期課程修了（博士）人間科学。2016年4月より環太平洋大学 学長就任。日本子ども学会理事。国立大学法人お茶の水女子大学経営協議会委員。専門分野は不登校、保幼小連携、教育経営、子育て・能力開発。学校法人創志学園 副理事長、社会福祉法人元気の泉 理事長（元気の泉保育園 [宇和島市]、大倉山元気の泉保育園 [横浜市] の2園を運営）、国際大学 IPUNew Zealand 副理事長。

